

- ・松陰 敬仰の気運醸成
- ・松陰 精神の継承普及
- ・松陰 教学の研究振興

○編集発行 財団法人松風会
〒753 山口市大手町2-18
山口県教育会館内 TEL 0839 221218



会報

松門



吉田松陰の魅力

松風会理事 三輪 稔 夫

道徳や歴史等は本来学問の分化以前のことであり、歴史の限界が松陰を不朽の人物にしているが、同時に松陰にはいつの時代にも通ずる『俊傑の学論』のあることを見逃してはならない。松陰を松陰たらしめたものは、実にこの点にある。「古人云はく、儒生俗吏安んそ事務を知らん、事務を知る者は俊傑に在り」と。書を読み古今を通識せざれば必ず俗吏輩に陥り、又徒らに書肆となれば即ち亦儒生のみ。両者皆俊傑の事に非ず。因って俊傑の学何如を求むるに、簡にして要を得るにあり。国体を明かにし、時勢を察し、士心を養い、民生を遂げ、古今明主賢相の事蹟を審かにし、万国治乱興亡の機関を洞かにする等数件を主本とし、「て、皇国の道の書、聖経賢伝は坐側から離さず、更に漢・唐・宋等の親炙すべき書を二十篇列挙している。

吉田松陰が僅か三十歳の生涯を私利私欲を度外に一生涯懸命に尽力した事業は国難の打開であった。下田踏海の拳に失敗してからは身の自由はなく、獄囚幽囚の連続となる。読書、書簡、著述、教育以外は何事もできなかった。しかし、松陰はこの逆境さえ一貫の救国人間建設の事業として全力を傾注した。

敗戦後の廃虚と平和希求、続く産業の復興と高度成長期に（松陰にも平和、民生はある）、前記松陰では間が抜けて始まらない。せめて松陰の人間尊重と教育の開眼深化等に重点を置く程度であった。その場合でも、松陰の亡命、踏海の挙、暗殺煽動、要撃策等が必ず問題となった。だが当時は幕府も藩も兵学師範を置き、仇討は義挙であり、鎖国と国際化が同時進行している際、松陰は死を賭けてぎりぎり最大限を生きて実行した。歴史的限界として許されると思う。

歴史に限界があるから、松陰は不朽となったのではなからうか。同じことは松陰の学問や教育についても言える。兵学は実践的でなければならぬが、一方武士は治者として学問を身につけて道義の実力者であることを山鹿素行以来要求された。松陰はこの先師に従って学問の社会的責任を自らに課した。今日の科学とは別物である。松陰も人・自然・事件を観察したが、その本質に迫らないことには観でも察でもないとした。また読書は思い出と結んで共感し、更に実行して考え味わい、大地に立つて歩く言葉として定着を図った。これに比し近代科学は、物を分析して実験実測や検証を繰り返すし、合法則性を抽出して終る。科学自身人生を意味付けることは何もしていない。今日、学問は次第に分化して、自己の社会的責任から遠のいて、道徳と学問は分離した。しかし、教育や

ものと推定される。安政二年以後を松陰思想の後期とすれば、これは前期を代表する論述である。後期になれば日本古典も出るし、中国関係の書も異なる観点から選定されたであろう。しかし本論でもすでにわが国の主体性は確立。また俗吏は古今を通識しないで事務機構の一端を片付けるに止まって難局対処に結びつかないし、儒生は博覧強記や字句に拘泥して刻下の急務との関わりを考えない。松陰の学風はここに明示されている。今、われ、ここで、何を為すべきか。『士規七則』に書いた「死して後已むの四字は言簡にして義広し。堅忍果決、確乎として抜くべからざる」実行が要求される。国難打開の志と気魄に尽きるといってよい。

わが国は石油ショックにも円高にもめげず、富国の道を進んで経済大国・科学技術大国になった。だが世界から孤立しては元も子もない。松陰は安政五年正月六日『狂夫の言』に「天下の大患は、その大患たる所以を知らざるに在り」と喝破し、村塾に立った。時代と世界に通じる道義と貢献こそ、今日の大変革（心と力）の核心である。



美祢松陰研究会のあゆみ

代表 岩 野 和 夫

はじめに

美祢松陰研究会は、昭和五十三年の四月、美祢市、美祢郡の現職の教員を中心に発足しました。最初は会の名称も「吉田松陰研究会」と呼んでいましたが、二年目から、「美祢松陰研究会」と変更し現在に至っています。会員の中には発足以来の先生や休学中の先生、新しく入会された先生といろいろあります。

「休学中」とは、美祢市や美祢郡の学校から他管区へ転勤のため、毎月の例会に出席が困難な先生方を一年間休学としています。このようなことで、毎月の例会の出席者は十一名前後です。私たちは、毎月一回の例会を第三金曜日の午後六時から八時過ぎまで、美祢市勤労青少年ホームを会場として輪読会を開いています。

夏休みには、現地研修として松陰のゆかりの地を歩くことにしています。年度末には、一年



現地研修「秋芳町、横田黙輔の碑」

間の研究のまとめを「卓然自立」という題の簡単な冊子にしています。卓然自立という題名は「大丈夫はよろしく卓然として自立すべし」という松陰先生の言葉から引用したものです。自ら立て。人がほめてくれるから俺は偉いのだとか、人がくさすから俺はつまらないのだというような考えはなくして、自分が自分の力を一杯に出し切っておれば、それで自分は安心ができて、

何人にも引きずり廻されない自分ができる。また、「卓然自立し、千聖万賢の動揺するところとなる事なかれ」とも松陰先生は言っておられます。

輪読会

私たちの会は、発足当時は山口県教育会が編集した「吉田松陰入門」をテキストとして使いました。当初は、自主研修と講師の三輪稔夫先生を迎えての輪読会が交互に開かれていました。自主研修の時は、順番に本文を音読した後、解説とかその背景とかを話し合っています。私たちの吉田松陰先生に対しての知識に差があり、そのため意見がいろいろでて熱心な会を持つことができました。一回に読む範囲は五ノ六ページに決めてありますが、いつも子どもたちの教育について話が飛び、松陰先生の思想やその背景などが話題となつて、先に進むことができないことがありました。しかし、会員同志の話し合いの中で、これからの教育のあり方や方向性がうかがえて、とても役立つことが多くありました。

次回の解説をする役に当たった先生の苦勞や皆で調べておこ

うという問題があり、気楽に集まれることばかりではありませんでした。「予習をやろう。」という言葉がよく出されていた。

発足して一年半ごろから、吉田松陰入門の中でも「講孟余話」を中心に輪読するようになり、毎月の例会の講師として三輪稔夫先生を迎えるようになりました。会員だけで意見を交換するより、三輪先生をまじえて、意見を出し合った方が有効であると考えようになりました。子供には、「宿題とか予習」を与えていながら、自分で孟子の全文や朱註、松陰先生の解説を読み、理解して会員に話すということは、大変むづかしい事でした。会員だけで意見を交換することから三輪先生を通して私たちが勉強するというように輪読会が変わりました。しかし、自主研修していた時の情熱は変わらず、疑問を出したり、担任している子供に応用することはないかと熱心に取り組んでいます。毎回の例会に出席して、得るものがあつたという充実感をつかみ、次回が待ちどおしい気持ちになることがしばしばでした。

美祢松陰研究会が発足して二



輪 読 会

「割記」の割には、鍼で刺すという意味があり、「孟子の本文の精義を引き出し、衣を刺繍して模様をつけるような文章の妙を編み出しているならば、何かと割記の名にかなう」と松陰先生も述べておられます。

昭和六十一年度で六年間、読み、講義を受けてきた「講孟割記」の輪読研究も終わりました。原文といっても仮名もつけられ、

年目から、講談社の学術文庫「講孟割記」(近藤啓吾訳)に移りました。この本は、萩の松陰神社に収蔵されている松陰自筆の原本を使用されています。この原本に「訳文」、「語義」、「参考」が収められています。

書き下し文になっているテキストであったが、大変難解な熟語が多く使われ、しきりに引用されている漢文、史実等にいささか閉口しながら輪読することに意義を感じ続けることができました。

昭和六十二年度は松陰全集の中から「士規七則」、「留魂録」、「七生説」等をテキストにして輪読を行いました。

「死而後己」とか「立志以為萬事之源」等の言葉の解釈や松陰思想について話し合いました。人間の死は、いずれ誰にもやってくる。人生の目標や志を持つことが悔いのない人生を送ることにつながるのです。

留魂録は松陰先生の遺書と考えられ、「身はたとい武蔵の野辺に朽ちぬとも留め置かまし大和魂」とか「至誠にして動かざる者は未だ之れ有らざるなり」の解釈や背景について三輪稔夫先生から講義と補説をいただき、松陰先生の気迫や精神にふれることができました。

昭和六十三年度は玖村敏雄先生が昭和三十四年から四十一年にかけて講演された資料をテキストにして輪読を行っています。玖村先生が若い人達に松陰の

出生から死に至るまでを「松陰と現代」とか「杉家の家風」とか「江戸留学と出奔」等項目ごとに解説されています。松下村塾の教育では、武士も町人も身分の区別なく、個人に応じて課題や目標を与えられたことは、今日の教育にも通じ大切にされなければならぬと思います。

夏期の現地研修

夏期休業の間に、一度、松陰先生のゆかりの地を訪ねて、一日の研修を行っています。第一回は、松陰誕生地の探訪と拓本を行いました。松陰先生の墓の側面や花筒、香台に刻まれた文

字を研究しようということで拓本をとることを計画し、その事前打合わせのため萩市教育委員会に出かけました。許可をいただき、全員が自家用車に分乗して参りました。

第二回は、涙松と松陰東送路を萩から明木まで歩きました。

松陰先生は安政六年五月二十五日、朝、降りつづく五月雨の中、一族旧友に別れを告げ、駕籠に乗せられたまま、江戸に送られました。萩の城下を見収めの場に、涙松で止まり、惜別の情に堪えず、「かへらじと思ひさだめし旅なれば、ひとしほぬるる涙松かな」無量の思いを一首の歌にされました。街道松を通して、萩市街が見えるのは、昔も今も変わりありません。明木への道は、車がやっと通れる巾であり、いろいろな遺跡もあり、昔がしのべれます。

私たちの会員が平戸や下田、さらに東北に旅行した時に訪ねた松陰先生の遺跡について、例会の時、話しあっています。

今後は、美祢の学校や旧家にある松陰先生に関係ある記録や九州遊学の時、歩かれた道筋の調査研究を計画しています。



四郎ヶ原の宿泊所？



会報「卓然自立」

会報「卓然自立」

人に送るということで「はずかしい」とか「書きにくい」ことも事実で、わずかに二、三ページの文章が何日もかかります。新しく入会の人に、冊子を見せると「毎年これを作らなければならぬのか」と驚かれます。毎年のように続けて行くには、ささやかな物で、会員の満足できるものであれば、それで良いと思います。いろいろな所に送付して、その反響の大きさには、いつも驚いています。

おわりに

輪読会や夏期の現地研修で学んだことを、年度末に整理して印刷しています。第一号は、昭和五十五年三月、それから毎年作成しています。第一号、第二号の時は、原稿を二月、三月の例会で検討しあい、意見を活発にだしていました。しかし、最近「生徒指導の中で」とか「たくましい防長っ子」とか「学校経営に思う」など書いてある会員もおります。純然たる松陰研究は他の研究者にまかせて、私たちは、毎日の子ども教育と結びつけた内容に変わっています。

私たちは、教育実践を支える教育理念の基底を松陰教学に求め、その現代的意義を明らかにしていきたいと思っています。文章に残すということ、他の

松陰の足跡をたずねて⑧

鎌倉―新潟―米沢―東京

萩市立三見小学校長 伊藤 藤 令 一

遊学の目的

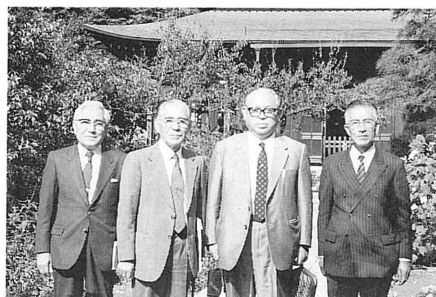
松陰の遊学行程は、一万三千キロに達するという。その目的は「地を離れて人なく、人を離れて事なし。故に人事を論ぜんと欲せば、先ず地理を見よ」というのが松陰の持論であった。

嘉永四年六月十三日鎌倉に瑞泉寺を訪い、進んで房相漫遊をすませ、十二月十四日に過書の下付を待たず亡命して東北遊学に出発する。

東北遊日記の序に「天下の形勢に茫乎たらば、平生の志も果すによしなし」との考えと「東北が露国の南下政策に対す国防上重要である」との遊学理由があった。

鎌倉（瑞泉寺）

研修一行は、九月二十九日午後、鎌倉二階堂紅葉谷を訪う。上山入口に石碑が目に入る。「松陰吉田先生留跡碑」とあり、裏面に「当山二十五世竹院和尚は、松陰先生の伯にあたり、嘉



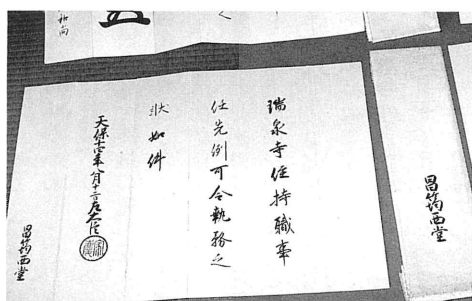
瑞 泉 寺

永の年二十二歳の六月を最初として、四回にわたり上山される」と刻し、建之者徳富蘇峰と明記してある。

百余の石段を登り山門に至れば「山号錦屏山」の額が掲げられている。これは、四季の景観が屏風の絵を観るように美しいという意味であろう。境内は、国指定史跡名勝庭園で、開山和尚「夢窓国師」の築庭園と聞く、庭園の老梅は、松陰上山当時のらの歴史と共に今日に至っているという。

大下一真和尚から抹茶の歓待

を受け、寺歴を拝聴する。次に、宝物である竹院和尚に対し「瑞泉寺住持職事任先例可令執務之状如件」天保十四年八月十二日、左大臣家慶（徳川十二代将軍）の辞令書を始め、勝楽寺住職や



竹院和尚辞令書

十三代将軍家定より円覚寺住職、十四代将軍家茂より京都南禅寺住職の辞令や竹院宛の松陰の書簡の拝見を許可される光栄にようした。

竹院和尚の初めの諱は、恵性後に、昌筠という竹院と号す。寛政八年秋に生れ、父は毛利志摩の家臣村田右中で、松陰の母瀧子の兄である。少年時に萩の徳隣寺で修業後四方を行脚し鎌倉円覚寺に至り、清陰和尚に学び後に淡海和尚に就いて印記を

受け瑞泉寺和尚に栄転した秀才高徳な名僧であると共に松陰が最も信頼した導師である。

竹院和尚に仏学の教授を受け相互に肝胆相照らし心肝を鍛錬陶冶され、嘉永六年九月十三日松陰は三度竹院和尚を訪れた。時に海外渡航の決意を表明すれば「死して後已む」で賛同され長崎への旅銀を援助している。

安政元年三月十四日に四回目の訪問をして目下の事情を述べた時「直往邁進」と激励している心境は、国の存亡の期に、国禁を犯して渡海する愛国精神の発露に共鳴されたのであろう。

萩野山獄中よりの書簡に「遙かニ瑞泉寺ノ上人ヲ憶フ」と題し「山光竹色窓ニ入テ青ク、方丈幽深錦屏ニ倚ル。今我レ囚ハレトナリテ空シク昔ヲ憶フ。月中一夜雲扇ヲ叩キシ」を拝読して、瑞泉寺を心の故郷と慕う心情が伺える。

竹院和尚の御冥福を仏前で祈念し、大下和尚の御厚意に深謝し抹香に送られ下山しながら竹院和尚が文久三年八月八日徳川家茂の辞令により就任された京都巨利臨濟宗南禅寺の末寺に都濃郡鹿野町漢陽寺があるのも何かの因縁であると思った。

新潟（出雲崎）

東京に一泊し朝九時に新潟駅に到着後直ちに雲崎に向かう。ここは、江戸時代に佐渡との官船が往来し幕府代官所があり良寛上人の出生地でもある。又、明治初年に日本最初の石油発掘の地としても有名である。

松陰は、嘉永五年二月十六日寒風積雪の中出雲崎に到着し、佐渡を遠望しながらも風波のため延留すること十三日間の心境を「客恨悠悠容るるに地なく、光は寒く残燭一星紅なり、晴を候つ船隻何れの時にか発せん、戸を撃つ雪声連夜同じ、身は寄す山河万里の外、夢は迷ふ佐越二州の中、中宵枕を欹けて魂頻りに騒ぐ、松響瀟に和して、声



出雲崎漁港

勢雄なり」と一日千秋の日々であつたことが伺える。

松陰の宿跡を探索したが見当たらず無念の涙で引き返し良寛堂の多宝塔へ、「いにしえにかわらぬものはありそみと……」の良寛自筆の歌を口ずさみながら駅に向う。

売店で、案内図を入手し松陰宿跡を発見したが車中のこととて如何ともし難く、再来の機会を待つことにする。

弥彦神社に向かう途中、良寛上人が寛政八年から二十年間居住された五合庵を、弥彦山と角田山の山峡の国上山、山腹で見学する。良寛上人の人柄を想像したとおり質素な庵である。

嘉永五年二月十五日の日記によれば、「翳（曇）岩室を発す石瀬を過ぎて弥彦に出で、弥彦大明神を拝す」とある。

越後国一宮名神大社弥彦神社の朱色大鳥居から参道をはさんで境内は、うっ蒼とした常緑樹に覆われ亭々とそびえる老杉古櫺の巨木は神々しく、万葉集「いやひこおのれ神さび青雲の棚引く日すらさめそふる」の和歌を懐古しながら拝殿にぬかずき旅路の安全を祈願して、宝物殿に入る。

越後文化発祥の源、一の宮に

伝承される宝物と古文書等が整然と陳列してある中に、松陰が江戸伝馬町獄人牢中の友人に宛てた書簡が軸物として展示してあるのには驚いた。安政元年、同囚であつた越後の嘯虎上人が許されて越後に帰る際に贈つた、獄中でお世話になった礼を述べた手紙に相違ないと思うが、このような遠隔の地で拝見するとは予想外なことであつた。

米 沢

新潟で旅の疲労をいやし米沢に着く。

松陰の東北巡遊経路は、江戸―水戸―白河―会津―新潟―出雲崎―佐渡―新潟―秋田―弘前―青森―盛岡―米沢―江戸とな



蔵王坊から建山を遠望

っている。

国指定史跡米沢藩主上杉家墓所に参詣する。中央に謙信公右側に、三代から十一代の奇数代左側に二代から十代の偶数代の廟所が並び樹齡四百年を越す老杉が並び静寂を極めている。米沢城跡を見学し蔵王坊高原で小憩をとる。遠山の山並を背景に紅葉した「ななかまど」は一幅の絵である。

松陰が、二月の豪雪連山の中を道なき道を踏破し米沢へと旅路を急いだ姿を想像すると連山が我々に奮起をうながしているようである。

東 京

飯坂に一泊し、上野駅に十二時半に無事到着。

今回の研修に、松陰研究の大家、三輪稔夫先生、岩本肇先生石川稔先生方から実地見聞の御指導を始め車中等での御高説の拝聴に深謝し快を分かち单身世田谷の松陰神社に向かう。

地理不案内のため時間を浪費しながらも松陰神社駅に下車し拝殿で、研修結果の報告をすませ後方の墓碑に焼香し「身はたとひ武蔵の野辺に朽ちぬとも留め置かまし大和魂」を口ずさみ



松 陰 神 社

ご冥福を祈念する。

隣接の寺院にある、萩市出身で明治時代三度も総理大臣として国政に参与された公爵桂太郎氏の墓前にぬかずき焼香と共にご冥福を祈る。

荒川区南千住小塚原回向院をたずねる。

寺院は戦災のためか、鉄筋コンクリートで近代적である。

明治維新殉難志士、安政大獄憂国の士が永眠される墓地に歩を止め安政大獄憂士松陰を始め十五名の志士に、献花焼香と共にご冥福を祈念する。

松陰の墓石後部に二十余の卒塔婆が建てられているが、山口県人の建てたものが見当たらないのには一抹の佻しさを感じた。再度墓前にたたずみ「桂小五郎・伊藤利助・飯田正伯・尾寺新之

丞」等の門下生が怨憎の涙を流しながら松陰の遺骸を手厚く埋葬した行為は、「この師在りて、この弟子在り」と感涙し、明治維新への原動力として躍動した業績を懐古していると「今から橋本左内先生の供養を営むから参列しては」と寺人に誘われた。

松陰と橋本左内は、面接皆無で書簡を通して交友を暖めた仲であると聞くが同志である。

御仏の思召しと深謝し焼香し

寺院を辞す礼をいうと寺人は「史蹟小塚原回向院について」の説明をしたので拝聴する。

徳川幕府の初め重罪者の刑場に宛てた場所、昔は「浅草はりつけ場」と称せられた所である。

磔地場として開創されてから二百二十余年の間に、埋葬された屍骸は、無慮二十余万と称せられるが、大部分は重罪者の屍骸である。文政五年八月南部家の臣、相馬大作、関良助の屍を埋めてから、国事犯の刑死者の死骸をここに埋める事になり

安政大獄以降憂国の志士の屍は大抵此処に埋葬された。寛文七年刑死者の菩提を弔うため、当院住職第善義観上人が幕府に懇願し草創したと結ばれる。

松風会に深謝し筆を置く。

県民大学講座「吉田松陰研究講座」開設状況一覧

年度 区分	58	59	60	61	62	63	計
開 催 市 数	6	10	11	12	12	11	62
受 講 者 数	725	1445	1570	1047	1002	1128	6917

は、PT
A連合会
婦人会、
老人クラ
ブ等と連

が主管して、各教育事務所及び
各市町村
教育委員
会の全面
的な協力
を得て実
施してき
ました。
各市町村
において
は、PT
A連合会
婦人会、
老人クラ
ブ等と連

家庭教育の振興を力説

故石川 稔先生

「凡そ人の子のかしこきもお

教学の思想全県に

県民大学講座

「吉田松陰研究講座」

山口県生涯教育センター

防長教育の気風を高め「たくましい防長っ子を育てる運動」の促進と「心と情の教育」の充実を目指して、昭和五十八年度にスタートした県民大学講座「吉田松陰研究講座」は、別表のように県下各市町村六十二会場で開講いたしました。本講座の開設にあたっては、(財)松風会並びに山口県生涯教育センターが主管して、各教育事務所及び各市町村教育委員会の全面的な協力を得て実施してきました。この六年間終始熱心に御講演いただいた石川稔先生が昨年七月御逝去されました。ここに、本講座における先生の御功績を称えますと共に、生前を偲び紙上をかりて心からご冥福をお祈りいたします。

本年度をもって、当初の計画を完了し、本講座の計画的開催の幕を閉じることになりました。この六年間終始熱心に御講演いただいた石川稔先生が昨年七月御逝去されました。ここに、本講座における先生の御功績を称えますと共に、生前を偲び紙上をかりて心からご冥福をお祈りいたします。



昭和62年10月21日楠町公民館における
故石川 稔先生の講演

ろかなるもよきもあしきも、大い父母のをしへに依る事なり。就中男子は多くは父の教を受け女子は多くは母のをしへを受けること……」(杉の家法に世の及びがたき美事あり。第一には先祖を尊び給ひ、第二に神明を崇め給ひ、第三に親族を睦じ給ひ、第四に文学を好み給ひ、第五に佛法に惑ひ給はず、第六田畠の事を親らし給ふの類なり。是れ等の事吾なみ兄弟の仰ぎのつとるべき所なり。皆々能く心懸け候へ、是れ則ち孝行と申すものなり」と野山獄から妹千代に宛てた手紙をよく引用されて、杉家の教育や家風について説かれました。特に、母滝から日常生活を通して学び、感受

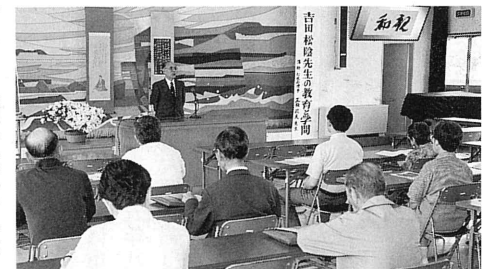
性豊かに成長した松陰の姿を母親の愛情、抱擁、辛棒の精神を、現在の家庭と対比しながら話され、親がビジョンをもち、身をもって手本を示す家庭教育の重要性について力説されました。父親は遠く(人生)を語り聞かせ、母親は近く(生活)を愛情でもって実践し、父母の厳しさややさしさのバランスのとれた家庭教育が大切であることを具体的な事例を示しながら論じておられました。

魂魄の教育を！

三輪 稔夫先生

「皇国の皇国たる所以、人倫の人倫たる所以、夷狄の悪むべき所以を日夜高声に称説す。獄奴蠢爾と雖も亦人心あるもの、涙を揮って吾が輩の志を悲しまざるはなし」と「回顧録」から下田港踏海の挙に出ざるを得なかった松陰の大和魂と足跡を説かれながら本論に入られ、現在教育に視点をあてた講演をされました。勞せずして栄光を求め楽しく面白い学習に走ろうとし

現在その重要性が叫ばれている家庭教育の議論に先鞭をつけられたと云うことができます。



昭和63年6月28日須佐町公民館における
三輪稔夫先生の講演

「皇国の皇国たる所以、人倫の人倫たる所以、夷狄の悪むべき所以を日夜高声に称説す。獄奴蠢爾と雖も亦人心あるもの、涙を揮って吾が輩の志を悲しまざるはなし」と「回顧録」から下田港踏海の挙に出ざるを得なかった松陰の大和魂と足跡を説かれながら本論に入られ、現在教育に視点をあてた講演をされました。勞せずして栄光を求め楽しく面白い学習に走ろうとし

おわりに

本講座の開設にあたってお世話いただいた諸先生方に厚くお礼を申し上げます。

久坂玄瑞は天保十一年（一八四〇）今の萩市平安古八軒屋で生まれた。幼名を秀三郎、名は誠又は通武後に義助と改める。字は玄瑞又は実甫、秋湖と号した。（以下玄瑞とよぶ）

父は藩医、良迪。母は中井氏玄瑞は三男。十四才で母を、翌年兄玄機に続き父を失う。家督を継ぎ家禄二十五石（寺社通のち八組士）を給せられた。



二十五才も年長の兄玄機は当時萩藩における蘭学の第一人者で、蘭書を釈約した医書や兵書を著した。また吉田松陰の師山田宇右衛門に蘭学を教え、勤皇僧月性や中村道太郎とも親交があった。このような中で育ち、早くから私塾に学んだ玄瑞の才は、藩校明倫館に籍をおくと詩文見識共に他を大きく凌いだ。

安政三年玄瑞十七才。九州の旅では熊本で松陰の盟友宮部鼎蔵と会し、かねて月性から入塾を勧められていた松陰の偉大な人間性について教えられ、長崎では外夷の実情に接して、玄瑞の対外思想は大きく動いた。

五月帰萩した玄瑞は奉呈義卿吉田君案下の書で「洋夷の跳梁と幕府の無策」を慨嘆する所信を述べた。これが松陰と結ばれる第一信となった。松陰は返書で「議論浮泛思慮粗浅、至誠中よりするの言に非ず。僕此の種の文を惡むこの種の人を惡む」と痛烈に批判した。玄瑞は再与吉田義卿書で「読了憤激、一言有り座下に白さん」と再度持論を開陳。松陰の返書は「足下軽鋭、未だ深思せず。人其の言を易くするは責なきのみ」と冷静な思慮対処を求めた。玄瑞は「非敢好議論也、要解其惑耳」

松陰をめぐる人びと(7)

久坂玄瑞 萩市 末永 明

と三度目の時勢の批判と対策の急を述べた。これに対して松陰は「捧読一番し従前の疑は渙然として冰釋せり。足下決然として自ら断じ今より手を下して虜使を斬るを以て務と為せ」と玄瑞の将来に期待した。

これを承けた玄瑞は程なく、明倫館の居寮生の身分で松下村塾に学ぶこととなるが、松陰の期待のことは終生玄瑞の言動の中に生き続けることとなる。村塾での玄瑞の学問は日に日に進み、松陰は江幡五郎への書には「玄瑞才あり気あり、僕輩の裁成する所に非ず。渠れは南山の竹なり」と評し、妹文が玄瑞に嫁す時の手紙では「防長年少第一流の人物。天下の英才なり」と書き贈り、高杉晋作と共に「松門の双壁」と称せられるようになった。

安政五年春、はじめて江戸遊学。玄瑞は薩土水等の諸藩の有志の士との交を始め長藩が討幕尊攘活動の先駆としての行動を江戸京都に展開する道を開く。安政六年五月、師であり義兄である松陰東送の命が下ると、義兄小田村伊之助、品川弥二郎等と共に野山獄で大いに謀議して、松浦松洞に松陰の像を写さ

せ松陰に自賛を求めた。

松陰の死後、初命日には門弟と共に村塾に先師の祭を営み、百日祭には遺髪を収めた。さらに門人の氏名を刻した手水鉢・花筒を墓前に供えるなど村塾の中心的存在として活動を続けた。

文久元年、長井雅楽の航海遠略策、皇妹和宮の降嫁問題等の公武合体の事と対決して諸藩の尊皇攘夷の士との交を益々深め「藩滅亡も大義なれば苦しからず」と京都・江戸・長州の間を往復した。

文久二年三月、風雲急を告げる中で「梓弓はるも来にけり武士の引かへさじと出る旅かな」の一首を残して萩を後にしたが、此の歌のとおり生きて再び萩の地を踏むことはなかった。同年廻瀾条議を著して藩主に上呈。

続いてイギリス公館の襲撃等を実行して尊攘の世論を動起。攘夷親征のため天皇の加茂・石清水行幸の議を策し、長藩の下関での外国船砲撃にも参加。七卿の都落ちにも同行する等奔走、周旋に努めたが、元治元年七月十八日、蛤御門の変で傷き鷹司邸で自害。行年二十五才。明治二十四年正四位を贈られた。

事務局通信

昭和六十三年度主要事業

・会報「松門」発行・配布

九月一日 第七号（六千部）

三月一日 第八号（六千部）

・吉田松陰研究講座の開設 県

生涯教育センターと共催、県

下十一市町で六月・十月に開催、受講者一一八人、本講

座は本年度で終結、昭和五十八年度からの受講者は六十二

会場六九一七人に達し、松陰

教学の思想普及と生涯学習の

推進に多大な成果をあげた。

・第四回松陰教学研究会の開催

十二月一日・二日山泉荘、県

小中高の校長三十名参加、講

師山中鉄三・河村太市・松田

輝夫・三輪稔夫の各先生

・第十回吉田松陰輪読会 八月

四日山口県教育会と共催、会

場教育会館 参加者約九十名

・「松陰の道」調査の推進

・研究団体代表者研究協議会

岡山における高杉晋作展に資

料十点貸出

・研究団体への助成―七団体

・松陰研究者との資料・研究物

の交換・松陰先生関係図書そ

の他の購入販売等

資料展示室

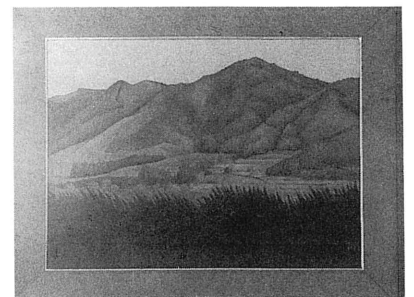
- 吉田松陰先生関係図書 (つづき)
- ・校註 講孟割記 日本学協会蔵版 昭48
- ・吉田松陰とその門下 古川薫 P H P 研究所 昭63
- ・吉田松陰の人間学的研究 下 程勇吉 広池学園出版部 昭63
- その他 (つづき)
- ・防長の人と書 臼杵華臣監修 教育書籍 昭60
- ・山口県 of の石造美術 内田伸 マツノ書店 昭60
- ・徳山の思い出 前田他 マツノ書店 昭60
- ・北辰餘光 御園生翁甫編 マツノ書店 昭61
- ・黒船前後の世界 加藤祐三 岩波書店 昭61
- ・日本思想大系 水戸学 今井他二名 岩波書店 昭61
- ・十八史略 全五巻 丸山 西



萩高校の士規七則碑拓本

- 野編記 徳間書店 昭61
- ・都濃郡誌 (復刻版) マツノ書店 昭61
- ・厚狭郡史 (復刻版) マツノ書店 昭61
- ・阿武郡志 (復刻版) マツノ書店 昭61
- ・大津郡志 (復刻版) マツノ書店 昭61
- ・歴史と旅 (雑誌) 秋田書店 昭61
- ・周防長門の名刹 長峰八州男編 毎日新聞社 昭61
- ・防長歴史用語辞典 石川卓美 マツノ書店 昭61
- ・萩藩閥閥録 六巻 (復刻版) 山口県文書館 昭61
- ・近代防長人物誌 (天地下) (復刻版) 井関九郎撰 マツノ書店 昭62
- ・毛利氏八箇国御時代分限帳 (復刻版) 岸 浩編著 マツノ書店 昭62
- ・戦国期毛利氏史料撰 (復刻版) 三坂圭治校註 マツノ書店 昭62
- ・戦国期中国史料撰 (復刻版) 米原正義校註 マツノ書店 昭62
- ・読・防長文学碑拓本行 西村勇 独楽庵 昭62
- ・史記 全六巻 市川・秋本訳 徳間書店 昭62
- ・清廉に生き抜いた美しき青春の記録 折本 章他 昭62
- ・大内村誌 (復刻版) 河野通毅編 マツノ書店 昭63
- ・吉敷村史 (復刻版) 三坂圭治編 マツノ書店 昭63
- ・石田村史 (復刻版) 御園生翁甫編 マツノ書店 昭63
- ・毛利十一代史十巻 (復刻版) 大田報助編 マツノ書店 昭63
- ・周防の女たち 島利栄子 マツノ書店 昭63

- ・文芸東北 (雑誌) 第二八〇号 文芸東北新社 昭63
- ・山口県地名大辞典 角川書店 昭63
- ・品川子爵伝 (復刻版) 村田峯次郎 マツノ書店 平1
- ・研究団体等の研究物
- ・卓然自立 八冊 美祢松陰研究会 昭55
- ・涵育薫陶 第一一六集 山口鴻峰松陰読書会 昭58
- ・徳山松陰会報 第一一四輯 徳山松陰会 昭59
- ・松陰読本の研究 萩吉田松陰研究 松朋会 昭59
- ・松朋 四冊 萩吉田松陰研究 松朋会 昭60
- ・抄魂 第一集 和木松風研究グループ 昭63



松陰先生誕生地 村上景介先生絵

(編集後記)

・編集計画の段階では昭和であった元号が、平成になって発行されることになった。昭和天皇崩御に哀悼の意を表し、ご冥福を祈ると共に平成元年がよい年になるようにみんなで努力したい。

・三輪理事の主張「俊傑の学」「死而後已」等々に松陰の魅力を感じ、もっと多くの松陰研究者が育って欲しいと願う。

・今回から「研究団体のあゆみ」を紹介していくことにした。美祢松陰研究会の真摯な研究のあゆみに敬意を表すると共に、ますます盛会になることを祈る。

・「松陰の足跡をたずねて」は昭和六十二年秋実施の報告であるが、本年度から「松陰の道」調査を始めたのでこの形での連載は今回で打ち切りとする。

・六年間にわたる「吉田松陰研究講座」は多大の成果をあげて本年度で終了したので、経過の報告をお願いした。関係各位のご協力に感謝する。(谷口)

・蒙談 第一一七号 蒙談会 昭60